

現代 QOL 学会 第6回学術大会 プログラム・発表抄録集

2018年7月1日(日)
早稲田大学国際会議場

主催:現代 QOL 学会理事会

共催:現代 QOL 研究所・日本心理職協会

後援:日本行動医学会・日本カウンセリング学会

(公社)日本精神科病院協会

NPO 日本パーソナルカラー協会

メンタルヘルス総合研究所

NPO 法人 心のケア グラシラス

(株)ダイヤモンド社・(株)一ツ橋書店

(株)実務教育出版・(株)風間書房

三美印刷(株)

ご挨拶

現代QOL学会第6回学術大会を迎えて

現代QOL学会の第6回学術大会は、今年の7月1日（日）に早稲田大学国際会議場（東京都新宿区西早稲田）で開催される予定です。

昨年の学会創立5周年記念学術大会では、特別講演、小講演、シンポジウム、ワークショップを含め、第1回大会と比べて、発表件数は約3倍になり、大会参加者も老若男女含め、96歳の高齢者から一般参加者、大学生までの幅広い年齢層の方々が参加して下さいました。その人数も第1回目と比べて、約3倍に増加しています。賛助会員、顧問の方々も参加していただき、きわめて盛会裏に開催されました。

また発表者の専門領域も、心理領域だけでなく、医療・福祉・学校教育・司法矯正・地域社会・家族家庭など、とくに実践領域で多岐にわたっています。

さて第6回学術大会は、前回を凌駕する大会にするため、主催・共催3団体が三位一体となり、全力を尽くしたいと考えています。

最近も、企業における働き方改革、ワーク・ライフバランス、ストレス対策などに国や行政が力を入れて、職業人、一般人のいわばQOL（生活の質、生き方や人生の質、生命の質）の向上・改善に取り組んでいます。とくに世界一の少子高齢化社会を迎えて、高齢者のケア・介護・QOLをいかに向上させるかも、大きなテーマとなっています。

上記の様々な実践的領域で、支援・ケアを要する人々はもちろん、一般の個人にとっても、いかに「質の高い」人生を送り、生きる価値を見出し、自己の存在価値やアイデンティティがどこにあるかをポジティブな観点からとらえ、真に有意義で価値ある人生を送ることが必要になってきています。QOLの維持・向上のための体系化された実践的プログラムを、国際的・学際的視点から究明することこそ、本学会の究極の目的です。

第6回学術大会に多くの方々が参加され、QOLについての議論を盛り上げて下さることを期待してやみません。

最後になりましたが、大会開催にあたって多くの関連学術団体や賛助団体から後援をいただいたことに感謝いたします。

平成30年6月吉日

現代QOL学会理事長／第6回学術大会準備委員長
織田 正美
同常任理事／同副委員長
山口 正二

主催：現代QOL学会理事会

共催：現代QOL研究所、日本心理職協会

後援：日本行動医学会、日本カウンセリング学会、日本精神科病院協会、日本パーソナルカラー協会
メンタルヘルス総合研究所、NPO法人 心のケア グラシアス、ダイヤモンド社、一ツ橋書店、
実務教育出版、風間書房、三美印刷

大会会場へのアクセス

大会会場：早稲田大学国際会議場(総合学術情報センター)

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-20-14

TEL:03-5286-1755(事務局)

交通：JR 山手線・西武新宿線 高田馬場駅 (徒歩 20 分)
東京メトロ東西線 早稲田駅 (徒歩 10 分)
都営バス(学バス) 高田馬場駅 → 西早稲田 (徒歩 3 分)
都電荒川線 早稲田駅 (徒歩 5 分)

案内図



大会本部への連絡

前日まで(E-mail をご利用ください)

E-mail: gendaiqol@gmail.com(学会事務局)

当日 TEL:03-3203-4151(内線 78-5195)(市島記念会議室:大会本部)

※当日、わからないことは大会役員・スタッフにご遠慮なくお尋ねください。

大会参加者へのご案内

1. 会場

大会は早稲田大学国際会議場（総合学術情報センター）3階で開催します。

2. 受付

7月1日（日）9時より16時まで、3階ホールで受付を行います。予約参加の方は受付で**参加費払込受領票**を、また学生の方は**学生証**を必ずご提示ください。大会会場では、受付でお渡しする名札を必ずお付け下さい。

3. 参加費

表1 学術大会参加費

	予約（6月22日まで）	学術大会当日
正会員	1,000円	2,000円
学生会員	無料	無料
非会員（一般）	2,000円	3,000円
非会員（学生）	無料	無料

4. 現代QOL学会会員総会

会員総会は7月1日（日）11時45分より、国際会議場3階第一会議室にて開催いたします。本学会理事会より、学会員の皆様にこの一年間の会務についてご説明いたします。学会員の皆様のご出席をお待ち申し上げます。

5. 昼食場所

会場内に食堂はありませんが、会場周辺には、飲食店・コンビニエンスストアがございますので、ご利用ください。

昼食を持参された場合、12:15～13:00の間、第二会議室を昼食場所としてご利用いただけます。恐れ入りますがゴミは各自お持ち帰りください。

発表者へのご案内

1. 小講演

1) 小講演の運営

小講演の時間は 30 分で、司会者による紹介等を含みます。運営については当日、事前に司会者にご相談ください。

2. ワークショップ、シンポジウム

1) ワークショップの運営

ワークショップの時間は 60 分、会員企画シンポジウムの時間は 90 分です。時間配分等の運営は、企画者（進行担当者）に一任いたしますが、終了時間は厳守してください。

2) 内容に変更がある場合

プログラムに掲載された発表者などに変更のある場合には、できるだけ早く、大会本部までご連絡ください。

3. 小講演、ワークショップ、シンポジウム共通のご案内

1) 集合時間

小講演者、ワークショップ企画者・発表者、シンポジウム演者の方々は、セッション開始 10 分前までに会場にお入りください。予めプレゼンテーション機器等の確認、会場担当者・司会者・共同発表者との進行の打合せをお願いいたします。

2) プレゼンテーション機器

会場には、PC (Windows)、プロジェクター、スクリーンが設置されています。OS のバージョンとプレゼンテーション用ソフトは別途、お知らせいたします。ご使用の場合は、データを USB メモリーにてお持ちいただき、セッション開始前に、予めデスクトップ上に落としてください。

3) 当日配布資料

当日会場で資料を配布される場合は、各自で 40 部程度をご用意いただき、セッション開始前に各発表会場の係員にお渡しください。係員が配布いたします。尚、会場内でコピー機はご利用になれませんので、ご了承ください。

学術大会タイムテーブル

	301(第一会議室)	302(第二会議室)	303(第三会議室)	
10:15	ワークショップ1 企画者:三浦南海子 10:30~11:30	会員企画シンポジウム 企画者:山田順子 10:15~11:45	小講演1 鈴木誠二 10:15~10:45	
30			小講演2 金高茂昭 10:45~11:15	
45				小講演3 森下優子 11:15~11:45
11:00				
15			(休憩)	
30	会員総会 11:45~12:15			
45				
12:00				
12:15	(昼食休憩)			
13:00	基調講演 織田正美 13:00~13:30			
30	(休憩)			
40	特別講演1 渥美由喜 13:40~14:40	現代 QOL 学会 事業企画委員会 主催シンポジウム 企画者:望月雅和 企画者:寺澤美彦 13:40~15:00	小講演4 藤平保茂 13:40~14:10	
14:00				
10				

			小講演5 松下清喜 14:10～14:40
40	(休憩)		(休憩)
50			
15:00		(休憩)	
15	特別講演2 廣崎昭子 14:50～15:50		ワークショップ3 企画者:市川仁美 14:50～15:50
50	(休憩)	現代 QOL 研究所主催 国際シンポジウム 企画者:望月雅和 15:15～17:00	(休憩)
16:00	ワークショップ2 企画者:織田正美 16:00～17:00		ワークショップ4 企画者:平川健 16:00～17:00

17:00

敬称略

大会プログラム

13:00～13:30 第一会議室

基調講演

演題：Quality of Life の重要性

講演者：織田 正美（本学会理事長、東京福祉大学特任教授、早稲田大学名誉教授）

司会者：山口 正二（東京電機大学教授）

13:40～14:40 第一会議室

特別講演 1

演題：人生を豊かにする『ワークライフバランス』 ～働かせ改革より前に、生き方改革を～

講演者：渥美 由喜（東レ経営研究所・内閣府地域働き方改革支援チーム委員）

司会者：小嶋 正敏（玉川大学教授）

14:50～15:50 第一会議室

特別講演 2

演題：身体の不調を訴えて、保健室に来る生徒の様子と「心の体操」を試みて

講演者：廣崎 昭子（元養護教諭）

司会者：久保田 浩也（メンタルヘルス総合研究所 代表）

小講演

10:15～11:45 第三会議室

司会者：寺澤 美彦（日本福祉教育専門学校）

10:15～10:45 小講演1 地方創生インターシップ活用による地域生活の向上

講演者：鈴木 誠二（法政大学地域研究センター）

10:45～11:15 小講演2 ひきこもりへの理解

講演者：金高 茂昭（佐久大学信州短期大学部）

11:15～11:45 小講演3 高校生・大学生のキャリア教育のありかたについて

—キャリア講座の効果とカウンセリングの実際から報告と考察—

講演者：森下 優子（首都医校・八洲学園・立正大学）

大会プログラム

13:40～14:40 第三会議室 司会者：山田 順子（日本教育カウンセラー協会）

13:40～14:10 小講演4 平成30年度介護報酬改定にみる軽度な障がい(知的障がい、発達障がい他)なら
就職できそうな職種の紹介

講演者：藤平 保茂（合同会社BIN）

14:10～14:40 小講演5 教育現場におけるグレーゾーン及び障がいのある生徒の就労移行支援への
取り組み

講演者：松下 清喜（星槎国際高等学校 横浜鴨居学習センター）

ワークショップ

10:30～11:30 第一会議室 ワークショップ1 色カルタ・クオリアゲーム –人生のQOLを求めて–
企画者・発表者：三浦 南海子（NPO 日本パーソナルカラー協会・彩色ケア色カルタ研究所）

16:00～17:00 第一会議室 ワークショップ2 ストレスとストレスの対処法[#]
企画者・発表者：織田 正美（東京福祉大学・早稲田大学）
#:定員10名(先着順)

14:50～15:50 第三会議室 ワークショップ3 QOLを高めるためのスヌーズレンを活用した環境設定
–高齢者のQOLを高めるための環境と介護に携わる人のQOLを高める環境設定とコミュニケーション力
企画者・発表者：市川 仁美（五感カフェ ひとまな倶楽部）
発表者：伝田 景光（公益社団法人 認知症の人と家族の会）

16:00～17:00 第三会議室 ワークショップ4 高校生のQOL向上
–脳科学の知見によるモチベーションアップとアロマセラピーを活用して
企画者・発表者：平川 健（高校VOICE）
発表者：大島 とみ子（志学舎）

大会プログラム

シンポジウム

10:15～11:45 第二会議室 会員企画シンポジウム

「可能なら100%の自立を目指す」は、常にベストの選択か？
～発達障がい傾向のある大学卒業生等への支援を通して学んだ「100%には遠くても」～
企画者・司会者：山田 順子（日本教育カウンセラー協会）
話題提供者：藤平 保茂（合同会社BIN）
話題提供者：松下 清喜（星槎国際高等学校）

13:40～15:00 第二会議室 現代QOL学会事業企画委員会主催シンポジウム 相談援助から社会的ケアへ
—学際的な学びとケアの教育

企画者・司会者：望月 雅和（東京大学）
企画者：寺澤 美彦（日本福祉教育専門学校）
話題提供者：金高 茂昭（放送大学・佐久大学）
話題提供者：諸橋 泰樹（フェリス女学院大学）
指定討論者：橋本 泰子（桜美林大学）
指定討論者：山口 正二（東京電機大学）

15:15～17:00 第二会議室 現代QOL研究所主催国際シンポジウム 国際日本における人間とケア
—臨床・ケア・社会を学際的に構想する

企画者・司会者：望月 雅和（現代QOL研究所主席研究員・教育研究局長）
話題提供者：松浦 広明（松蔭大学副学長 兼 学術総合センター長）
話題提供者：伊藤 圭子（東京大学国際文化教育支援室特任講師）
話題提供者：櫻坂 英子（駿河台大学教授）
指定討論者：橋本 泰子（桜美林大学名誉教授）
指定討論者：山口 正二（現代QOL研究所副所長・学術局長）

発表抄録

13:00~13:30 第一会議室 基調講演

演題：「Quality of Life の重要性」

講演者：織田 正美 本学会理事長、東京福祉大学特任教授、早稲田大学名誉教授

司会者：山口 正二 (東京電機大学教授)

プロフィール：公益社団法人日本心理学会理事長、日本心理医療諸学会連合理事長、一般社団法人日本健康心理学会理事長、一般社団法人日本心理学諸学会連合副理事長などを歴任。現在、日本心理職協会会長、現代 QOL 学会理事長、現代 QOL 研究所所長、公益社団法人日本心理研修センター副理事長など。

要旨：QOL 学会は設立 6 年目を迎えて、7 月 1 日（日）に早稲田大学国際会議場で開催される（会場は設立初年度から同一）。

今回の大会はプログラムの内容がきわめて充実しており、特別講演 2 件、小講演 5 件、ワークショップ 4 件、シンポジウム 3 件、これに基調講演 1 件の合計 15 件の内容から構成されている。

これは設立 5 周年記念大会（16 件）とほぼ同数である。このことは「QOL」が個人レベルだけではなく、学校、企業、家族、地域社会などの集団や組織においても重要な意味をもつようになってきたことを示しており、「QOL」というテーマ、研究の重要性が研究者だけでなく、一般関係者においても関心が高まってきたことを示すものである。

「QOL」は政治のレベルでも、また近年では高齢者施設でも重要視されている。広くいえば「QOL」はわれわれにとって「人生いかに生きるべきか？」ということを科学的、客観的に研究し、応用するために重要な概念となりつつあるということである。

13:40~14:40 第一会議室 特別講演 1

演題：「人生を豊かにする『ワークライフバランス』」

講演者：渥美 由喜 東レ経営研究所・内閣府地域働き方支援チーム委員

司会者：小嶋 正敏（玉川大学教授）

プロフィール：1992 年東京大学卒業。複数のシンクタンクを経て、2009 年（株）東レ経営研究所に入社。

要旨：あまりにも長い間「心・感情・気持ち・精神といわれる領域の問題」を勘違いしてきたか、忌み嫌っていた？人間はこの問題を抱えないで生存は出来ない。体と心が渾然一体の生き物なのに、なぜ体は健康で考え、心は病で考えるのか？心の問題だけが予防なしで「病の早期発見が一番」など間抜けなことがまかり通っている。

何故、トータル「人間健康」の維持・増進・疾病予防・治療・リハビリでないのか？医学や心理学など、いわゆる「学」が発展すると、人間は、どんどん「パーツ化」して細胞生物化や蛋白質化して、人間が消えて見えなくなる。進歩のために細分化は必要であろうが、トータル化も同時進行でなければ間違いなく歪化し道を失う。

かつて、私たちは東海道を歩いていたから、アスレチッククラブでのランニングマシンは必要なかった、肥満もなかった。生活そのものが運動であったから、わざわざ運動のための時間も場所も機器もお金も必要なかった。今や、新幹線で階段にはエスカレーターまでがあり人間のトータル性や動物性が失われた。人間は動物なのだ。

心の領域では、立ち居振る舞い・作法・挨拶の仕方・長幼の序、身のこなし方、行動の醜さの戒め、言葉使い、郷に入っては郷に従うなどの躰、ごくごく早期の幼児期から仕込まれ、心のありようが日常生活の中で自然と訓練された。この基礎訓練で反応の「しなやかさ」を習得し人間関係で病になるまで落ち込むことを防いだ？幼少期は脳波が δ 波・ θ 波状態で生活し、物事を写真のように受け入れる状況だから、鉄は熱い内に入ると、三つ子の魂百までなどの言葉が生活の中で生まれた。この状態が消えた現在はイジメが蔓延し、心の病が多発し薬では回復しない。感情を理性で管理する間違いを犯す。では、如何にすべか？健康づくりは？訓練方法は？

発表抄録

14:50～15:50 第一会議室

特別講演 2

演題：「身体の不調を訴えて、保健室に来る生徒の様子と『心の体操を試みて』」

講演者：廣崎 昭子 元養護教諭

司会者：久保田 浩也（メンタルヘルス総合研究所代表）

プロフィール：昭和36年東京警察病院高等看護学院卒業。昭和37年和歌山県赤十字病院勤務。昭和40年和歌山県養護教諭として各小・中学校に勤務（在職中に資格取得）。平成11年3月定年退職。現在に至る。

要旨：1. はじめに 看護師資格のみで“養護教諭の仕事”とは何なのか知らないで、「赤チン」付けてくれていたらいいと言う一言で仕事についた。（当時は全国的には勿論、本県でも養護教諭の配置率は低く、養護教諭への認識も低かった）様々な研究会への参加や先輩に学びながら、「子どもの心と体」を見つめて取り組むことの大切さに気が付いた。以来、34年間「子どもの心と体」の問題が深刻化する中で養護教諭の仕事の大切さと難しさに悩む日々が続いた。

2. 保健室を通して関わった生徒の様子（体の不調）；主としてH中学での様子から

・昭和46年～58年の12年間と平成3年～平成11年の9年間にH中学に勤務した。非行問題がピーク化し、学級崩壊や校内が荒れた。（昭和50年前後）

・O君との出会い（昭和58年）不登校、微熱、腹痛、便秘等々（O君はH小を卒業し、お家の都合で和歌山市の中学校に1年間在籍、2年生の時にH中学校に転校して来た）

「しんどい」と訴えて来室した時に体温測定すると微熱があったので「君、熱あるけど、どこか悪いんちがう…」と言う私の言葉に心を開いてくれた。「先生、僕しんどいよう…」学校へ来られない日々が続き、天気の良い日は父母が学校に行くように言うと、体を硬直させ壁にこぶしをぶっつけ血が吹きだしたり、母親に対して鎖を振りまわしたり、と凄惨な形相を見せた。明日は学校に行くと、前の日は張り切っていたのに…。そんな日々の繰り返しだった。昭和59年は私が他校へ転任したが、お母さんからの電話が我が家の夜にかかった。父母の葛藤が続きH校の先生方の取り組みや努力もあり、卒業し定時制高校へ進学した。この頃から少しずつ不登校生徒への理解が教師間に出てきた？

・保健室がごった返した様子（平成6年頃）体がしんどい、気分が悪い、頭が痛い等々、来室者が急増した。

「先生、僕は一日中熱帯魚の水槽を見て過ごしていたいよ。」来室生徒の一言より。

保健室来室生徒が、平成5年度は延べ241名だったのに、平成6年度は759名と三倍にも増えた（全校生徒140名余り）

*「心の体操」久保田先生のご指導を得て試みたこと

こうした状態で困っていたとき、「心の体操」という心身のリラックス法を取り上げた雑誌の記事を読み、興味を持った。直ぐに提唱者の久保田浩也先生に連絡してやり方の詳しく載った本を送っていただき自分でもやってみた。すると、肩がスーッと軽くなり、とても気持ちがいいと思った。先生の大阪での講座にも参加し、やり方をきちんと習って、生徒にも教えてみることにした。保健室で個人指導したり、自習時間等を利用して来室者の多い学級へ出向き、養護教諭による学級指導をした。微熱があった生徒がほぼ平熱になったり、腹痛を訴えていた生徒が元気になったり、肩こりが楽になった等々回復が見えた。その結果、来室生徒が平成7年度は256名に減りほぼ平年並みになった。

3. 取り組んだこと

- ・保健室に来室する生徒の実態を具体化し、教職員に訴えた。
- ・子どもの「心身の問題」を教育計画に取り入れて学校全体でとりくんだ。
- ・保護者向け講演会を開催した（小児科医による）。
- ・全校生徒の健康点検（始業前に自分の様子を記入する）
- ・来室状況の個人カードを作った。

4. 振り返って

“心の体操”については全校的に取り組むことが出来なかった。子どもの「心と体」の問題は依然として深刻な状況にあるように思う。基本的な生活習慣を大切にしつつ、子どもの「心と体の健やかな成長」のためにも久保田先生が提唱されている「心の体操」が多くの学校で取り入れられ、定着していくことを願っている。

発表抄録

小講演

10:15～11:45 第三会議室

司会者：寺澤 美彦（日本福祉教育専門学校）

小講演1 地方創生インターシップ活用による地域生活の向上

講演者：鈴木 誠二（法政大学地域研究センター）

地域の活性化に向けては、地域企業の競争力を高め、雇用の拡大と所得の向上を、実現させる必要がある。しかし、地方の企業は、慢性的な人手不足により、成長に向けたイノベーションが停滞し、地域の活性化を阻害する要因となっている。人手不足の主な要因は、進学や就職を機とした都市部への人材流出（社会減）であり、地方の過疎化にも大きな影響を及ぼしている。このような現象は、地域生活の主観的幸福感を支える、地域の伝統行事等を通じた他世代や同世代との交流、住民同士の共同作業定着などによる地域コミュニティの存在に大きく影響することを示している。

本講演では、過疎化が進む首都圏近郊の農山村地域で、地域活性化と地域生活を向上させる、地方創生インターシップの展開方法に関して、検討した結果をお伝えする。検討にあたっては、群馬県みなかみ町の、「一般社団法人みなかみ町体験旅行」に、創生インターンシップで約2週間滞在した学生15名と、地域住民との接触内容をもとに、地域生活の主観的幸福感への影響内容を事例に用いた。検討の結果、地方創生インターンシップの受入れは、地域や企業に潜在するアントレプレナーシップを触発する機会と捉え、キャリア教育の一環として展開すれば、組織への帰属意識を高め、新たな人材還流が期待されると導けた。実現に向けた展開条件は、①事業経営者や地域住民と、事業創出やキャリアデザインに関する議論の場を設けること。②UIターン経験者を、キャリアデザインを支援するメンターとして配置し、就業体験の前後も関与させること。③提供する商品のお客様体験、従業員との共同作業体験、住民宅への宿泊等の生活体験もカリキュラム化し、地域一体で提供することであった。

小講演2 ひきこもりへの理解

講演者：金高 茂昭（佐久大学信州短期大学部）

“ひきこもり”の問題は、改善困難事例が多く、周囲の人々の困惑と苦悩は募るばかりと言えるだろう。そして、当人の自助努力による改善をじっと待っていても年数が募るばかりであろう。また、その原因について、ある程度の目星が付かなければ、対応の仕方も浮かばないと言える。

ここでは、“ひきこもり”を生物心理社会モデルの立場から再認識し、対応の仕方の目星を付ける意味でもその原因について、どのように理解するのが妥当かということに触れてみたいと思う。

小講演3 高校生・大学生のキャリア教育のありかたについて

—キャリア講座の効果とカウンセリングの実際から報告と考察—

講演者：森下 優子（首都医校・八洲学園・立正大学）

近年、日本の大学ではキャリア教育の充実に力をいれており、次いで高校でも、そのカリキュラムをとりいれているところが増加している。キャリアデザインとは、広く、自己の人生をどのようにデザインしていくか、デザインをしない（意識しない）選択もふくめて、生き様そのものことなのだが、現況では、職業を中心としたキャリア、就職支援が主体となっている傾向が多い。

高校、大学で、カウンセリングとキャリア教育の講義を担当している立場から、その効果と、学生の現実の様相を報告する。その上で、キャリア教育について、どのようなありかたが、学生が、それぞれ個々人の等身大で、自己をみつめ（自己を理解）、自己の未来と今の自己がつながりを感じた展望をもてるのか、イギリス在住時のイギリスの教育とも比較して、一考察を報告する。

発表抄録

13:40～14:40 第三会議室

司会者：山田 順子（日本教育カウンセラー協会）

小講演4 平成30年度介護報酬改定にみる軽度な障がい（知的障がい、発達障がい他）なら就職できそうな職種の紹介

講演者：藤平 保茂（合同会社BIN）

団塊の世代が75歳以上となる2025年に向けて、国民一人一人が状態に応じた適切なサービスを受けられるよう、質が高く効率的な介護の提供体制の整備を推進すべく、平成30年度介護報酬の改定が、先日公表された。そのなかで、「多様な人材の確保と生産性の向上」が掲げられている。各介護サービスの改定事項が発表された中で、軽度な障害（知的障がい、発達障がい他）であり、かつ労働条件と障害特性が一致すれば就職できそうな以下の2職種の改定概要を紹介しながら、みな様と意見交換をしたいと考える。

訪問介護について、介護福祉士等は身体介護を中心に担う（機能分化）とともに、生活援助については、人材確保の裾野を拡大するとともに、新研修を創設して質を担保する。訪問介護事業所における更なる人材確保の必要性を踏まえ、介護福祉士等は身体介護を中心に担うこととし、生活援助中心型については、人材の裾野を広げて担い手を確保しつつ、質を確保するため、現在の訪問介護員の要件である130時間以上の研修は求めないが、生活援助中心型のサービスに必要な知識等に対応した研修を修了した者が担うこととする。このため、新たに生活援助中心型のサービスに従事する者に必要な知識等に対応した研修課程を創設することとする。その際、研修のカリキュラム（具体的な内容は今年度中に決定する予定）については、初任者研修のカリキュラムも参考に、観察の視点や認知症高齢者に関する知識の習得を重点としながらも、国家試験を要しなく、この研修終了者を訪問介護員として常勤換算で申請できる。

また、訪問看護における複数名訪問加算について、医療保険での取扱いを踏まえ、同時に訪問する者として、現行の看護師等とは別に看護補助者が同行し、役割分担をした場合の評価の区分を新たに創設することとする。この場合の看護補助者については、医療保険で示している定義と同様とし、「看護補助者とは、訪問看護を担当する看護師等の指導の下に、療養生活上の世話（食事、清潔、排泄、入浴、移動等）の他、居室内の環境整備、看護用品及び消耗品の整理整頓等といった看護業務の補助を行う者のことを想定しており、秘密保持や医療安全等の観点から、訪問看護事業所に雇用されている必要があるが資格は問わない。」とされている。

小講演5 教育現場におけるグレーゾーン及び障がいのある生徒の就労移行支援への取り組み

講演者：松下 清喜（星槎国際高等学校 横浜鴨居学習センター）

本校を利用している生徒には長い不登校からの脱却を機に高校生活を楽しみながら次のステップへと挑戦する生徒や、発達障がいやその傾向がある生徒や、障がいの手帳をすでに持って高校生活に挑戦しつつ学校生活を通して集団行動の理解を図り次のステップに進む努力をする生徒などが在籍している。障がいの有無や程度だけでなく、家庭環境も個性も、望むものや目指すものも、様々に異なる生徒たちを多く抱えて指導している。特に見過ごされがちだった片寄りがある子やグレーゾーンの生徒に対しての指導は、集団生活を通してだけでは難しいので、個別支援計画を立てて、周辺理解を図りながら進めて行かなければならないのは言うまでもない。

就労支援にあたっては、高等学校内だけでの指導では充分に行うことは難しいので、本人・家族・学校を取り巻く社会環境や社会制度の利用もしながら、本人の就労へと結び付けていくことになる。

このように本校の取り組みをまとめて言葉にするのは簡単であるが、実際にこの内容での教育を実践していくには、本人も、本人の家族も、本人を指導し支援する我々教員も、毎日様々な課題や困難を乗り越えていく必要がある。それでも我々教員が諦めずに指導や支援を続けているのは、この過程を通して、「本人が自分の特性への自己理解を深め、本人自身の《家族や地域社会や就労先に自分の特性を理解してもらい、適切な支援がもらえるように、自分からも適切な働きをすることができるような力》を養うための大切な前段階を、本校のこれらの指導や支援が担っている」と考えているからである。

決して、本人の高校卒業即就労がゴールというわけではない。だが、本人が自己肯定感を持って就労し前向きに社会参加を果たせるかどうかは、本人だけでなく本人の家族や本人が暮らす地域社会や社会全体の一人一人の生き方や生活にも関連する問題でもあると考えている。そこで、既述の本校の取り組みについて理解していただくために、本校の取り組みを具体的に紹介していきたい。

発表抄録

ワークショップ

ワークショップ1 色カルタ・クオリアゲーム —人生のQOLを求めて—

企画者・発表者：三浦 南海子（NPO 日本パーソナルカラー協会・彩色ケア色カルタ研究所）

普段の生活で私達は様々「色」に囲まれており、そしてその「色」は様々な感情効果を伴い私達の生活に潤いを与えている。一方これから大きな社会問題になっていく認知症ケアには様々な手法が用いられているが、色を利用した方法は少ない。我々の情報の8割は視覚から得られると言われており、その中でも色の影響は大きいものと思われる。そこでその色を利用し介護の技術にしようというコンセプトである「彩色ケア」を発進している。その一環として「色カルタ・クオリアゲーム」を考案した。カルタは文字がなく色がついている取り札を使用する。リーダーが読み札（物の名称や思い出＝ex, リンゴの色・お母さんの色は?）を読み、ゲーム参加者は自分がそれから想像した色を取り、その色を選んだ理由を語り合うというシンプルなゲームである。我々日本人が昔から遊び馴染んできた「カルタ取り」をモチーフとして考案したもので認知症状のある人にも受け入れやすい。

まず、参加者は取り札のたくさんの色を見る事で、脳が活性化することは予想される。そして五感とともに記憶されている思い出は、この色を見る事がきっかけで意識される。それまで寡黙であった参加者も忘れていた過去の出来事をたくさん話し、表情が豊かになる。また知らない人同士でも色のカードという媒体・話のきっかけがあることでコミュニケーションも取り易くなる。自己肯定感が進み安心感を得られると想像できる。

一方、介護者は認知症の方の自己表現しにくい心理を探ることができ、ゲームで語られた話は介護するうえでの大切な資料となり寄り添うケアの実践に役立つ。その人の人生の質を高めるための大きな要素となる。

また、クオリアとは主観的な意識体験＝感覚質と言われているが、この色カルタのゲームにおいては「心の琴線に触れる何か」と定義している。このクオリアを刺激することで、認知症状のある方の「人生のものがたり」をたくさん聴くことができた。今回のワークショップでは、これまで筆者が聞いた様々な話を披露すると共に、参加者全員にこのゲームを体験してもらいたい。

当初認知症ケアとして考えたこのゲームであるが、実はそれだけにとどまらず、老若男女あらゆる人同士共に楽しめるゲームであり、簡単に実践することができる事が理解していただけるものと期待している。

ワークショップ2 ストレスとストレスの対処法[#]

企画者・発表者：織田 正美（東京福祉大学・早稲田大学）

#:定員 10名(先着順)

このワークショップでは、下記の①~③の内容で実施する。

①ストレス及びストレスの種類を、ストレス検査を実施することによって明らかにする。そのためこのワークショップは、「定員を10名」に制限しており、具体的な内容のワークショップとすることを目的としている。

この検査を受検すると現在の自己のストレスの種類・程度が客観的に明らかになる。

②ストレスに対する「対処資源」の重要なものの1つとして「人間関係」がある。われわれは、自分の周りにいる人々、友人、家族によって支えられている。その人たちとどのような交流の仕方をしているか？またどのようなストレス解消のための援助をうけているか？あるいはどのような支援を与えているかを従来の内外の研究成果をふまえて解説する。

③ストレスが過剰になったとき「身体」にどのような影響を及ぼすか？いわゆるストレス病について解説する。

発表抄録

ワークショップ3 QOLを高めるためのスヌーズレンを活用した環境設定

—高齢者のQOLを高めるための環境と介護に携わる人のQOLを高める設定とコミュニケーション力

企画者・発表者：市川 仁美（五感カフェ ひとまな倶楽部）

発表者：伝田 景光（公益社団法人 認知症の人と家族の会）

スヌーズレン（Snoezlen）とは、オランダ語で「鼻でクンクンにおいをかぐ」という意味の Snuffelen（スヌッフレン）と「ウトウト居眠りをする」Doezelen（ドースレン）からなる二つの造語に由来している。

オランダの知的障害者福祉施設で生まれたスヌーズレンの理念は、最近では、特別支援学校や療育センター等を利用する障害のある人だけでなく、認知症の方々、ホスピスや病院等に入院しているの方々、リラックスすることが必要なスポーツ選手等にも応用され、教育、医療、保健、福祉、介護等などのさまざまな場面に活用されている。

企画1 スヌーズレンとは何か

企画2 認知症カフェでのスヌーズレンの取り組み

企画3 スヌーズレンの理念を取り入れた認知症の方々や家族、介護士が心を開ける環境設定

企画4 スヌーズレンを体験しましょう！

ワークショップ4 高校生のQOLの向上

—脳科学の知見によるモチベーションアップとアロマセラピーを活用して

企画者・発表者：平川 健（高校VOICE）

発表者：大島 とみ子（志学舎）

将来を担う高校生のQOL向上とモチベーションアップを目的として、年間のべ180の高校において講演および研修を行っている。演題の多くは「誰もが実践できる全国模試総合1位の学習法とモチベーション」である。学習法を通じて「やれば出来る！」という自信を持たせ、これを日常の勉強や部活動に活かすことで高校生のQOLの向上を図ることを目的に活動している。ワークショップでは「右脳&左脳のコラボレーション学習法」や「触覚暗記法」などをご紹介したい。

また、高校生は家族や友人との人間関係や高校卒業後の進路への不安、受験勉強をする上でストレスは生じるものである。高校生のQOLを向上させるためには、ストレス・マネジメントは必須である。ストレスの軽減や気分の切り替え、そして、勉強の効率アップなどのためにアロマセラピーの様々な作用も有効であるといえる。ワークショップでは、高校生とご家族の心身の健康に役立つあらゆる香り、例えば抗ウイルス作用、抗不安作用、頭脳明晰化作用などを持つアロマセラピーの精油の香り、また、精油を使って作ったアロマスプレーの香りを体験していただく。

*アロマセラピーとは、フランス語のaroma（自然の芳香）とtherapie（治療法）を結合した言葉で、植物の精油を用いてその香りの効用を楽しみ、心身の健康の維持、促進を図る芳香療法である。

東洋では、紀元前3000年頃のメソポタミアやエジプトでの宗教儀式、医療、化粧品に香りが使われ、西洋では、紀元前430年頃、ギリシアのヒポクラテスが香油マッサージを推奨。18世紀後半、人工の化学薬品の開発により衰退したが、20世紀に再び脚光を浴び、美容や健康、また、ストレス・マネージメントに活用されている。

発表抄録

シンポジウム

会員企画シンポジウム「可能なら100%の自立を目指す」は、常にベストの選択か？

～発達障がい傾向のある大学卒業生等への支援を通して学んだ「100%には遠くても」～

企画者・司会者：山田順子（日本教育カウンセラー協会）

話題提供者：藤平保茂（合同会社BIN）

話題提供者：松下清喜（星槎国際高等学校）

発達障がいやその傾向がある大学生には、当人の努力だけでは解消できない感覚過敏や、対人対応や読字・書字の困難さに悩むケースもある。それらにより心身が疲弊し、大学卒業後に経済面も含めた「100%の自立」を目指しても、就活段階で挫折したり、何とか就職できても働き続けることが難しくなり、自宅に引きこもりがちになるケースも珍しくない。18-55歳の引きこもりは全人口の10%、約1000万人という推計もある。

だが、市民ボランティアを組織して発達障がい傾向のある成人の就労支援を長年続けているNPO主催者（津富宏,2018）は、「引きこもっている、本人に合った働く場があれば、すぐに働き始めることができる人も多い」という。企画者が支援している中にも、「上司から口頭で指示された内容が一度では理解できず、臨機応変の対応も困難でも、学生時代から続けているパン屋さんでの『半日を週4日』のアルバイトならできる」ケースもあれば、「芸術的才能があり卒業研究で見事なアニメ作品を完成させたが、対人対応は苦手だし、設定された締切に間に合わせることも、それで食べていくのも無理そうなので、それと無縁の単純な事務作業のアルバイトで疲弊する毎日」というケースもある。また、「障害者枠で一般企業に採用され、経済的自立も何とか可能だ。だが、本当は福祉分野でやりたい仕事がある。その資格取得のための勉強をするには、退職しなければならない。だが、退職したら、2度と今のような給料をもらえる勤め先は見つかりそうもない。夢を諦めるしかないのか。それとも思い切って退職して、取得したかった資格を何とか取得できたら、もし今以上の収入は得られなくとも、今のうちなら両親から少しは支援が得られるかもしれない。今のうちに、挑戦すべきか」と悩んでいるケースもある。

本人の努力だけでは解消が困難なハンディのある人も、そうでない人も、誰もが「可能なら100%の自立を目指す」のが、どんな場合でもベストの選択なのだろうか。「自分の心身の状態を見ながら、無理のない範囲で働いて報酬を得る努力は続け、無駄遣いはしないが、楽しみやくつろぐ時間も大切に、社会参加・社会貢献にも努力する」という生き方を、障がいの有無に関わらず誰もが許容し合い、応援し合っていく方が、誰にとっても生きやすい社会になり、長い目で見ると社会全体にとってもよいのではないだろうか。各々の支援実践も振り返りながら、「可能なら100%の自立を目指す」というのは常にベストの選択か、を参加者とともに検討してみたい。

現代QOL学会事業企画委員会主催シンポジウム 相談援助から社会的ケアへ

—学際的な学びとケアの教育

企画者・司会者：望月 雅和（東京大学）

企画者：寺澤 美彦（日本福祉教育専門学校）

話題提供者：金高 茂昭（放送大学/佐久大学）

話題提供者：諸橋 泰樹（フェリス学院大学）

指定討論者：橋本 泰子（桜美林大学）

指定討論者：山口 正二（東京電機大学）

例年、議論の深まりをみせている本学会事業企画委員会主催の学会シンポジウムに続き、展開的に少子高齢化時代において重要となっている「ケアと教育」をテーマとし、本年は相談援助・教育相談から社会的ケアに関する教育の構想をめぐって論議を深めていく。

とりわけ本シンポジウムでは、近年、刊行されたテキストである『子育てとケアの原理（北樹出版、2018）における相談援助の視点、カウンセリングとソーシャルワーク等の基本的差異を踏まえて、近年社会的な問題になっている社会的ケア（社会とケアの視点）までを包括的に捉える。シンポジウムは、心理学者と社会学者を招聘し議論を展開していく。なお、本企画は、日本子育て学会研究プロジェクト推進委員会「教育とケアの学際的研究」の研究成果の一部でもある。学際的に本分野の将来構想を探求していきながら、ディスカッションを深めたい。

発表抄録

現代 QOL 研究所主催記念国際シンポジウム 国際日本における人間とケア

共催: 日本心理職協会

—臨床・ケア・社会を学際的に構想する

企画者・司会者： 望月 雅和（現代 QOL 研究所主席研究員・教育研究局長）

話題提供者： 松浦 広明（松蔭大学副学長 兼 学術総合センター長）

話題提供者： 伊藤 圭子（東京大学国際化教育支援室特任講師）

話題提供者： 櫻坂 英子（駿河大学教授）

指定討論者： 橋本 泰子（桜美林大学）

指定討論者： 山口 正二（東京電機大学）

本企画は、本学会附属研究機関として設置されている現代 QOL 研究所主催、業務提携団体である日本心理職協会の協賛による国際シンポジウムであり、特に本年は、「国際日本における人間とケア」をテーマとし、本研究所の理念である学際的で国際的な視点から、各界の第一線の研究者を招聘して開催されるものである。

とりわけ、人間とケアを考える際に重要と思われる国際的な医療経済、人権、人口変動から、臨床心理、人物の事例・ケース（原理・歴史、女性の商品化と国際的な越境）等、学際的な学びを契機として、生活や生命の質を探求していく。このシンポジウムの機会に、幅広い参加者や議論の深まりを念願している。

現代 QOL 学会第 6 回学術大会

《共催団体》

現代 QOL 研究所 日本心理職協会

《後援団体》

日本行動医学会 日本カウンセリング学会
公益社団法人日本精神科病院協会 NPO 日本パーソナルカラー協会
メンタルヘルス総合研究所 NPO 法人 心のケア グラシアス
株式会社ダイヤモンド社 株式会社一ツ橋書店
株式会社実務教育出版 株式会社風間書房 三美印刷株式会社

《賛助団体》

株式会社風間書房 株式会社実務教育出版
株式会社ダイヤモンド社 株式会社一ツ橋書店 三美印刷株式会社

本学術大会を開催するにあたり、上記の各団体より多大なご支援をいただきました。
ここに記して、心より感謝の意を表します。

《理事会》

理事長 織田正美* 会長 松原達哉
金高茂昭 小嶋正敏 沢宮容子 高橋弘 張日昇 寺澤美彦 平尾元尚 村上正人
望月雅和 山口正二† 山田順子 橋本泰子

(50 音順 *準備委員長 †準備副委員長)

現代 QOL 学会第 6 回学術大会プログラム・発表抄録集

発行日 2018 年 6 月 1 日
発行者 現代 QOL 学会第 6 回学術大会準備委員会
委員長 織田正美
〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1
玉川大学リベラルアーツ学部 小嶋研究室内
E-mail : gendaiqol@gmail.com
印刷 豊栄堂印刷株式会社

ストレスに強い人材の採用・育成に！ ストレス耐性テスト **DIST**

DISTはストレス耐性を2つの側面から診断します。

●どのようなストレスに強いのか

「対人・対課題・対役割・対環境」の4特性に対するストレス耐性を診断します。

●ストレスに対処する資質をもっているか

自己効力（自分の力を信じて一歩を踏み出す力）をはじめ、ストレスを乗り越えていくうえで必要な5つの特性から「強いストレス状態」に対処できるかどうかを診断します。

用途：採用選考・適正配置・人材育成・管理職登用

※感圧複写式。採点時間は1人5分。結果がすぐわかります。

所要時間：10分 問題数：100問

※コンピュータ採点DIST-COM、Web診断サービスWeb-DISTもございます。

価格：864円(税込) 部数：10部よりご注文を承ります。

詳細は <https://jinzai.diamond.ne.jp>



株式会社ダイヤモンド社

人材開発編集部 TEL.03-5778-7229

〒150-8409 東京都渋谷区神宮前6-12-17

e-mail: hd@diamond.co.jp

紙メディアと電子メディアの融合、

私たちは
お客様の課題に
お応えする



ソリューションを提供します。

SANBI

三美印刷株式会社

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8

TEL. 03-3803-3131 FAX. 03-5604-7039

URL. <http://www.sanbi.co.jp>

E-Mail: sanbi@sanbi.co.jp

大学生のADHD特性と進路決定に関する実証的研究

篠田 直子著 定価(本体6000円+税)
進路決定についての影響を確認し、特性を捉える質問紙を用いたグループワークを提案。障害学生支援にかかわる関係者に対して具体的な支援法を提供する画期的な書。

うつ病休職者の集団認知行動療法と混合型研究

中村 聡美著 定価(本体8000円+税)
休職者の語りから職場ストレスと認知及び対処行動との関連を検討。職場復帰のための集団認知行動療法を用いて、再発・再休職予防の心理的支援のための示唆を得る。

楽観的帰属様式の臨床心理学的研究

沢宮 容子著 定価(本体6500円+税)
ポジティブ心理学における重要な概念の一つである楽観性。その中でも特に楽観的帰属様式に焦点を当て、認知行動療法の立場から実証的に論究する。

生活分析的カウンセリング法の開発に関する研究

松原 達哉著 定価(本体7000円+税)
著者が長年携わってきた学生相談を基に独自に開発した生活分析的カウンセリング法の理論と実践を紹介。無気力・不登校の大学生に実施され、多くの実績をあげている。

成人知的障がい者の「将来の生活場所の選択」に関する研究

山田 哲子著 定価(本体7500円+税)
知的障がい者家族の「親亡き後」や「将来の生活」をテーマに、当事者の声に基づいた新しい家族支援の在り方について探求し、実践研究によりその効果を検討した。

風間書房 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
TEL 03-3291-5729 FAX 03-3291-5757

メンタルヘルスの臨床・カウンセリングや研究分野に



新版 STAI 状態・特性不安検査
State-Trait Anxiety Inventory-Form JYZ

著者 肥田野直・福原真知子・Charles D.Spielberger 他
B5判・複写式・実施10分・自己採点方式(採点15分)/1セット50部/定価8,300円(税込)

一過性の状態不安と普段の特性不安を測定

スピルバーガー博士を共同研究者に、不安測定の問題紙として信頼性の高い「STAI-Y」を日本人向けに最適化した状態・特性不安検査。日本人特有の情緒(感情)を考慮することで、状態不安の密度の測定と、人格構成としての特性不安における個人差の測定がより正確に。別売「新版STAIマニュアル」有。



EQS エクス・EQ(情動知能)スケール
Emotional Intelligence Scale

著者 内山喜久雄・島井哲志 他
B5判・複写式・実施10分・自己採点方式(採点15分)/1セット30部/定価9,000円(税込)

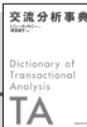
注目のEQ理論に基づいて情動知能を査定する人格検査

EQ理論に基づき、「自己対応」「対人対応」「状況対応」の3つの領域について、9つの対応因子と21の下位因子を測定。企業における人材採用や人材活用のための研修、定期的なメンタリティの健康診断として幅広く活用できる検査。別売「EQSマニュアル」有。

本格的な交流分析(TA)の事典。初學者から上級まで必携の一冊

交流分析事典

著者 トニー・ティルニー 監訳 深澤道子
A5判・328ページ/定価4,104円(税込)



実務教育出版

〒163-8671 東京都新宿区新宿1-1-12
<http://www.jitsumu-kyouzai.com/wellness/>
TEL **03-3355-1801** (教育教材事業部)